

翻訳論はメディア論であるか

—佐藤『ロスベアグ・ナナ』学問としての翻訳—『季刊翻訳』『翻訳の世界』とその時代—

温秋穎

一 はじめに

翻訳論もメディア論であるか、という仮説が再び頭に浮かび上がったのは、佐藤『ロスベアグ・ナナ』学問としての翻訳—『季刊翻訳』『翻訳の世界』とその時代』と併読しながら、『流言のメディア史』で以下の一文を見た時であった。「あいまいな状況にともに巻き込まれた人々が自分たちの知識を寄せあつめることによって、その状況について有為な解釈を行おうとする「コミュニケーション」という流言の定義から出発して、メディアで流される流言というものは、情報崩壊ではなく、情報構築なのであるという」(一)。

メディア流言と同じく、翻訳も情報の曖昧さと絶えず格闘するコミュニケーション・情報伝達の行為である。これは、翻訳によつて歪曲されたとされる誤訳などについて、欧米のトランスレーション・スタディーズ (Translation Studies) では「翻訳の不可能性」と「翻訳の可能性」をめぐる議論がすでに多く行われている。また翻訳理論では、多く知られるヤーコブソン (Roman Jakobson) が提起した三種類の翻訳における第三の「記号間翻訳 (intersemiotic translation)」という概念を見れば、書かれたテキストを音楽、映画、絵画などの別の非言語の記号に「翻訳」するというメディア論の側面が確実に存在していることが分かる。

まだ盛んとは言えないが、翻訳理論とメディア理論の融合をもとめるメディア翻訳やジャーナリズム翻訳といった研究領域が近年芽生えてきた⁽¹⁶⁾。しかしながら、翻訳論とメディア論とはどれほどの縁類性を持つだろうか、あるいは、翻訳論とメディア論との融合は可能であるか、という問題にはまだ定説がなく、むしろメディア研究にとっても今後注目を集めるテーマになるであろう。このように考えると、日本における翻訳研究・翻訳にまつわる言説を学問の角度から考える本書は、メディア研究にも示唆を与えるものである。

佐藤『ロスベアグ・ナナ著（二〇二〇）『学問としての翻訳』は、「なぜトランスレーション・スタディーズが日本に根づかないのだろうか」という学問の制度化に関する問題に関心を持っており、一九七〇年代から一九八〇年代にかけて発行された『季刊翻訳』と『翻訳の世界』という両雑誌を考察した。これは、二〇一一年に著者によって刊行された論集、『トランスレーション・スタディーズ』からも問題意識を受け継ぎ、日

本の翻訳研究の独自性を模索する試みである。『季刊翻訳』と『翻訳の世界』誌上の言説を主な分析対象として、雑誌の編集者と執筆者に対してインタビューを行った本書は、雑誌研究の視点からも考えられることが多く、学問と大衆を架橋する学問の前段階としての雑誌研究というテーマ自体が、情報の流通に注目するメディア研究とも共通している⁽¹⁷⁾。

二 本書の要約

第一章 英国におけるトランスレーション・スタディーズの誕生

第一章では、トランスレーション・スタディーズがもともと盛んな国である英国において、学問の誕生およびその展開を考察した。著者はまず、一九七〇年代以前の欧米で、外国語教育の一環としての翻訳が学問としての地位を得られない状況をバスネット (Susan

Basnett)の研究によって確認しており、トランスレーション・スタディーズの発展を妨げるものとして、翻訳の理論と実践のギャップが埋めにくいという難点を指摘した。一九七〇年代以降、翻訳理論の領域で起きたいくつかの新しい動向としては、リーズ大学のホームズ(James S. Holmes)が一九七二年にオランダで行った「トランスレーション・スタディーズは翻訳の理論と現象に関連する学術的な学である」という発表と、ユネスコにおける翻訳者と翻訳の権利を守る提言である「翻訳者と翻訳の法的保護、および翻訳者の地位を向上させるための実践的な方法への提言」^④が紹介されている。

その後、一九八〇年代に翻訳論と実践への関心が高まっており、やがて一九九〇年代に、トランスレーション・スタディーズは高等教育の中で地位を固めた。

しかし、一九七〇年代にアメリカでも翻訳の理論が芽生えたにもかかわらず、トランスレーション・スタディーズは創設期以降、特に英国を中心として展開し

ていった。この原因について、著者は欧州連合(EU)の多言語政策に潜んでいる英語の覇権性に注目している。多文化・多言語の欧州統合という理想をもつEUにおいて、翻訳の役割が大きく期待されており、加盟国の言語もすべて公用語とされていたが、実質的には英語・フランス語・ドイツ語という基軸言語(pivot language)だけを介して、通訳・翻訳が行われていた。

そのなかで、特に英語の事務言語としての使用率が高まっており、多言語主義の理想と現実にはずれが生じた。著者はこの問題について、学術界における公用語でありながら、アジア諸国でも必修外国語である英語の覇権性を提示して、「世界の共通語」である言語の地位こそが、トランスレーション・スタディーズがイギリスで成熟した成り行きのポイントであると見ている。なお、本章では翻訳をめぐるユネスコとEUという二つの国際機関に注目して、いずれもトランスレーション・スタディーズの形成に寄与したとしているが、この両者の差異については更に考察を深めることがで

さるのではないだろうか。ユネスコとEUは、規模や加盟国、公用語の使用において異なった点がある。EUはヨーロッパ地域に限定した国際機関であるが、国際連合の下に置かれたユネスコは加盟国数一九〇カ国の世界的な規模である。また、加盟国の言語がすべて公用語とされるEUに対し、ユネスコでの公用語は、世界中の加盟国のなかの九カ国の言語に限定されている。このように考えると、第一九回ユネスコ総会議で「翻訳者と翻訳の法的保護、および翻訳者の地位を向上させるための実践的な方法への提言」が提起された経緯とその発展がいかなるものであったかは、注目すべき重要な問題である。二つの国際組織は公用語の範疇が異なっているため、翻訳と通訳が行われるなかで「覇権性」などの事情も異なった領域で起きていたと推測できるからである。さらに、国際連合・ユネスコとEUの言語使用が翻訳研究にそれぞれ与えた影響を比較して論じる可能性が見えてくると考えられる。

第二章 『季刊翻訳』『翻訳の世界』の時代と翻訳言説

第二章以降は、議論の対象は欧米から七〇年代から九〇年代にかけての日本へ移されていく。一九七〇年代、アメリカで生まれた翻訳の理論が日本で受容されたことや、翻訳の授業が国際基督教大学で開設されたことなどから、トランスレーション・スタディーズの萌芽は見られるが、二〇〇〇年代までは日本に根付かなかった。その原因を探っていくために、一九七〇年代から一九九〇年代にかけて発行された翻訳をテーマとする専門誌である『季刊翻訳』と『翻訳の世界』が手がかりとされた。雑誌に表れた革新的展開と学問的な側面に気づいた著者は、トランスレーション・スタディーズが二十一世紀になってようやく日本に遅れて入ったという説に、疑問を投げかけていく。

(一) 『季刊翻訳』(一九七三―一九七五)

日本翻訳研究会が編纂した『季刊翻訳』について、

著者はまず雑誌が創刊された意味や意義を概観し、そして誌上に登場する翻訳をめぐる議論を考察する。とくに、今日のトランスレーション・スタディーズのなかでは重要な概念である「翻訳論」にかんする言説を詳細に考察していた。

まず、八つの編集方針から読み解いており、実践と理論を統合して、人文学・社会科学・自然科学にまで及ぶ学際的な意識などが、『季刊翻訳』の「現在的な感覚」を示す上で重要であると確認された。そのなかで、高度成長期にビジネス翻訳が増加したことや、学生運動が終息した後の知的好奇心に満ちた学問の再出発などが、雑誌の創刊背景として重要視されている。雑誌の執筆陣としては、鶴見俊輔や磯谷孝、五木寛之などを含む豪華な専門家の構成が見られる。また、執筆者が専攻する言語の分野は多様であり、雑誌上で取り上げられたトピックの射程も広がったという。誌上の議論を全部要約することは容易ではないと考えた著者は、誌上で繰り返されたテーマを、現在のトランスレーシ

ョン・スタディーズで共有されているキーワードに絞り、「等価」「文化翻訳と誤訳」「原典と翻訳への態度」「誤訳の指摘」「読者論」「研究室めぐり」「翻訳論」に分けて分析を行った。

(二) 『月刊 翻訳の世界』(一九七六)

『季刊翻訳』は一九七五年に姿を消したが、寄稿者の顔ぶれが似ている『月刊 翻訳の世界』(大学翻訳センター、現DHC)が一九七六年に刊行され始める。その後、出版者が大学翻訳センターから日本翻訳家養成センターに移り、雑誌名も『月刊 翻訳の世界』から『翻訳の世界』に変わった。著者は雑誌の名称変更の前後を取り立てて区別していないが、『月刊 翻訳の世界』と『翻訳の世界』を日本の高度経済成長期の翻訳ブームでの重要な翻訳誌と位置づけている。

雑誌の創刊意図と誌上における翻訳の言説が検証されており、『季刊翻訳』と比べると、実務翻訳や誤訳を

強調する流れがあった一方、翻訳論と実践が乖離する傾向が顕著であったことが明らかとなった。著者はさらに、翻訳専門学校と『季刊翻訳』との接点にいくつが気づいており、通信教育と『翻訳の世界』の関係性を指摘している。バベル翻訳大学院は創業した一九七四年に通信制の翻訳家養成講座を開講し、その広告が『翻訳の世界』にも掲載されている。さらに、『月刊翻訳の世界』創刊号の編集人であった湯浅美代子は、現在バベル翻訳大学院の学長であるという。著者は『翻訳の世界』がバベルの通信教育のPR誌である側面を鋭く観察しているが、それでもなお学問的志向を持った雑誌であると判断したのは、雑誌の執筆陣と記事の内容から、現在のトランスレーション・スタディーズとの接点を数多く見出したからであろう。

なお、本書では十分に触れられていないが、バベルの通信教育から『翻訳の世界』へと分析していくうえでは、大学翻訳センターという存在をどのように理解するかという点も興味深いと考えられる。『月刊 翻訳

の世界』の最初の発行所は大学翻訳センター、発行人は大学翻訳センターの創業者・吉田嘉明（現・DHC取締役会長）であり、編集人は今日のバベル翻訳大学院学長・湯浅美代子が務めていた⁵⁵。『翻訳の世界』がバベル学校の通信教育とかかわるPR誌であるだけでなく、バベル学校と同じく大学翻訳センターの業務の一環としても捉えられる可能性があるであろう。

（三）『翻訳の世界』の一九八〇年代

『翻訳の世界』は一九七〇年代から一九八〇年代に入ってから誌面の内容に大きな変化が見られないが、一九八三年に丸山哲郎が編集陣に加えられてから、「翻訳をとおして現代を考えるインターカルチャー・マガジン」への志向が強くなったという。産業としての翻訳と実践翻訳を認めながらも、誌上では翻訳の思想的な観点について語られることも多くなり、そのテーマも多彩になった。そのなかで、「翻訳者の解釈」「翻訳権の問題」「翻訳の多様性」「翻訳を論じるための基準」

「言語と社会」「文化翻訳」「メディア翻訳、ジャーナリズム翻訳」「漫画とコミック」「アジアと翻訳」「翻訳理論と翻訳批評」「マイノリティ」「人物」といった議論のトピックが紹介された。執筆者のなかには、『ことばと国家』を上梓した二年後の社会言語学者の田中克彦^(六)、日本発翻訳論の原点とされる柳文章、文化人類学者の青木保がみられる。

ここで挙げられたトピックを見ても明らかな通り、翻訳は単なる「言語」の問題を超えている。外国語に限らず、言語内部の翻訳問題や文化の翻訳⇨異文化理解などの社会や文化の領域まで拡大しており、なかには、マイノリティや人種主義的な差別、国際化への反省など、当時としては先駆的な見方もあった。これらの議論に基づいて、著者は『翻訳の世界』から読み取れる翻訳論を、日本が欧米に先行した文化的転回として考えており、「現代思想、ポストコロニアル・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズ、インターカルチュラル・スタディーズなどが日本式に展開した、翻

訳論や翻訳をこのような学問的観点から扱う研究への関心の結果だ」^(七)と総括した。

ただし、現代思想、ポストコロニアル・スタディーズなどの欧米で誕生した学問を受容した日本において、その翻訳論が果たして欧米のトランスレーション・スタディーズとは異なった発展を見せたのか、という点については、著者の現段階の分析からはやや見えにくい。というのも、翻訳にかかわる議論が以上のように無限に拡大していったが、最終的に「翻訳」という原点にいかに関収されたか、また、翻訳論の原点をどこに位置づけるか、という問題を問わなければならないからである。この課題の一つの側面としては、すでに著者が刊行した論集『トランスレーション・スタディーズ』で触れられているように^(八)、日本の翻訳文化には、中華圏の言語⇨漢字文化を翻訳することから、欧米近代の言語と文化を翻訳することへの転換という主軸が存在していることを指摘できる。

(四) 『翻訳の世界』の一九九〇年代

一九九〇年代初頭の『翻訳の世界』は、一九八〇年代のインターカルチュラルな内容を受け継ぎ、さらに社会や国際政治の関心事にも取り組んだ。たとえば、一九九一年に湾岸戦争が勃発した後、同年の六月号では「終わりのなき湾岸戦争」という特集が組まれた。政治学者の酒井啓子が「言葉は何を伝えたか―湾岸における西側と日本の報道姿勢について」という記事で、ジャーナリズムと翻訳との関係性について述べている。湾岸危機から戦争に至る間、日本の報道が欧米の「オリエンタリズム」をそのまま検証することなしに受け入れており、「中東諸国でながされる『噂』情報が「現地報道」とされた、という国際放送のバイアスを指摘した。そのため、国際報道では、言葉を取り巻く背景を理解するという真実に近づく努力が必要であるという。

また著者は、西欧と日本を中心に代表的な翻訳論とされる三六編を編集した「翻訳―知的生産の未来Ⅱ」

(一九九二年十一月号)という特集に注目している。

トランスレーション・スタディーズの教科書に頻繁に登場するベンヤミンやデリダなどの翻訳論はもちろん、日本の思想家である折口信夫、二葉亭四迷などの翻訳に関する言説もあった。ベンヤミンの翻訳論から影響を受けた学者兼翻訳者の執筆者が多かった背景として、この時期にポストモダンが日本の思想的潮流になったことが紹介された。また、特集のなかで取り上げられた翻訳とナショナリズムの言説について、著者は現在のトランスレーション・スタディーズの議論と照らしあわせて、翻訳事情で幻視されたユニバーサルリズムに潜んだ民族中心主義に対して警鐘を鳴らした⁹⁾。

しかし、一九九三年四・五月号(合併号)から『翻訳の世界』は大きく内容が変わっており、「英語を学び、翻訳の楽しさを知る、学習情報誌」を謳う実務的な情報誌となった。女性が中心として描かれるようになり、女性のためというシュルダークコピーのもとで、女性の寄稿者が増えていった。一九九〇年代の経済不況のな

かで、差別などによる女子大学生の就職難が背景とされた一方、語学や翻訳は女性の仕事であるという偏見を助長する可能性というジェンダーの問題も提起された。

第三章 『翻訳の世界』にかかわった人々の言葉から

第三章では、『翻訳の世界』に関わってきた編集長の今野哲男、丸山哲郎、学者で翻訳家の井上健、管啓次郎、西成彦、沼野充義、詩人で翻訳家の伊藤比呂美、翻訳家の鴻巣友季子と辻由美の計九名に対するインタビューをまとめたものである。著者は、翻訳という行為や翻訳論をどのように捉えていたのか、また、『翻訳の世界』をどのように見ていたのかという二つの質問を中心としてインタビューを行い、書かれた資料からは見えにくい側面や時代の背景などを探ろうとした。第三章の書き方は、インタビューの双方の発話をそのまま記録する一問一答の形式ではなく、関連する情報

を補充して著者の判断によって文章化されている。これにより議論の一貫性は確保されたが、著者から質問を発する方法がかえって見えにくいという点では少し残念に思われる。

インタビューを通して、『翻訳の世界』ないし『季刊翻訳』という雑誌の性質について、『ユリイカ』や『現代思想』のような商業的かつ学術的な雑誌であると判断されていた。これは、鴻巣友季子、管啓次郎、沼野充義の叙述でも検証されたものであるが、そもそも、沼野が発した「アカデミックな研究の営みは、この自由なもの「引用者注…文芸ジャーナリズムを指す」でなければならぬ」(二〇)という言葉に、著者も共振していたのではないだろうか。一方、編集者の丸山哲郎が作り上げた翻訳テーマのマトリックスは、トランスレーション・スタディーズのテーマ群とかなり重なったが、それは「曖昧模糊とした中から」作成したものであったことが、雑誌の性質を理解する上に注目し値する点と考えられる。

『翻訳の世界』の誌面だけでは探りにくいものとして、大学研究者の誤訳も指摘する別宮貞徳の「欠陥翻訳時評」が当時代表的な連載であり、人気を呼んでいたことが挙げられる。また、執筆者の辻由美が欧州における翻訳家の権利を守る組織である「翻訳の家(Translation House)」を日本にも導入しようとしていたという理想や、バベル翻訳学校の人脈を生かして翻訳を大学院レベルで教えることを文部省に申請して結局通らなかったことなどのエピソードは、いずれも一九八〇年代から一九九〇年代にかけての翻訳にかかわる重要な出来事であり、著者のインタビューによって明らかにされた。

第四章 「トランスレーション・スタディーズ」の誕生？

第四章では、学問が誕生する条件から出発して、日本でのトランスレーション・スタディーズの誕生期を

再考している。まず、学問が制度化される条件を精査するために二〇一三年の Carmen Millan と Francesca Bartina の論考と二〇一二年の武田珂代子の論考を参照した。Millan と Bartina は欧州でトランスレーション・スタディーズが確立したとされる根拠として(一)大学における学部、(二)学術雑誌、(三)学会、(四)学術会議、(五)博士課程を挙げた。武田は、日本のおけるトランスレーション・スタディーズが最近の数年で制度化されており、(一)学会の成立、(二)会議、(三)出版社・出版物、(四)その主題を専門とするプログラムという四つの要素を満たしていると判断していた。両者の定義について著者は、欧州と日本では翻訳にかんする研究が、大学でのプログラムと博士課程の設計、博士号の名称、専門誌の出版と査読、学術会議の形式などでそれぞれ異なる点を詳細に比較した。Millan と Bartina が挙げた条件の言葉だけでなく、言葉が意味する内容にも敏感であるべきだというのである。

以上のように、著者は「学問の方法、存在の仕方が一つではない」という議論に移って、欧米の学術界にある英語覇権主義などの権力関係を目を配りながら、欧米発の理論の日本での適用性を精査するべきことを説いた。さらに、日本におけるトランスレーション・スタディーズの制度化の条件と言われる（一）学会の成立、（二）会議、（三）出版社・出版物、（四）その主題を専門とするプログラムは、すでに一九七〇年代に土台が整えられたことを、本書の内容をまとめつつ論じている。そのなかで、『図書館情報学用語辞典』（二〇一三年出版）から「学術雑誌」の定義である「狭義には、査読制度を採用し、独創性のある最新の研究成果を伝える投稿論文を掲載する雑誌。広義には、学術的な内容の記事を掲載する雑誌」という一文を引用して、『季刊翻訳』『翻訳の世界』という両誌を広義での学術雑誌と捉えている。

第五章 現代日本における学問としての翻訳の混迷

それでもなお著者は、学問としての発展を前提とした日本のトランスレーション・スタディーズが、欧州のように発展する条件を備えているとは考えていない。日本におけるトランスレーション・スタディーズの混迷の状況は第五章で紹介されている。

日本の文化庁が主催する現代日本文学の翻訳・普及事業や日本翻訳大賞は存在しているが、国の政策として翻訳家や通訳家を養成する意志が見られないことや英語を中心とする欧州の言語に偏重する傾向が指摘された。

質の高い翻訳家・通訳家を養成するためには、大学レベルでの翻訳教育、とくに調査研究能力を身に付けさせる翻訳の教育法が必要であると痛感した著者は、欧米のトランスレーション・スタディーズや中国、韓国の大学レベルでの翻訳教育の実態をつぶさに観察している。一方、日本での翻訳教育は専門学校を主な担

い手として、教育法が「xxx」という英語を「yyy」という日本語に翻訳する」という定形の翻訳技術にとどまっている。これは、「言語が閉じられた統一体ではない」という認識がまだ広がっておらず、翻訳を矮小化する傾向があるからだという。

翻訳と通訳が今現在学問のレベルに位置づけられていない原因として、個人個人の思いも挙げられた。翻訳家や翻訳研究を尊重する心情が社会一般で薄いのであれば、トランスレーション・スタディーズにさほどの関心を持つことができない。また、翻訳の研究者が実践の現場に立つ者の心境から離れると、学問において理論の側面と実践の側面を調和させることができない。

三 本書の評価と課題

本書は、『季刊翻訳』と『翻訳の世界』という二つの翻訳専門誌を発掘したことによって、一九七〇年代か

ら一九九〇年代の日本における翻訳文化、翻訳言説の状況に光を当てた。通訳研究は近年蓄積されていたが、翻訳の歴史についてはまだ不明瞭なところが多い日本の翻訳者・翻訳史研究の中では、意欲的な一冊であると評価したい。

トランスレーション・スタディーズを専攻とする著者は、日本独自の翻訳研究の系譜を探ろうとして、二〇〇〇年以前の日本における翻訳と翻訳者についての研究、翻訳と翻訳者にまつわる歴史への注目を促している。このなかで、一九七〇年代から一九九〇年代にかけての『季刊翻訳』と『翻訳の世界』の雑誌内容を考察した結果、『季刊翻訳』と『翻訳の世界』を広義での学術雑誌として捉える可能性を提示しており、日本における翻訳研究の下地は少なくとも一九八〇年代頃に整えられたとした。商業雑誌であり、かつ学術雑誌という様相を呈した雑誌が、ほかの国々では見かけたことのない日本に特有の雑誌文化であるという著者の判断は、長年の海外研究経験がもたらした新鮮な視点

といえる。

以上のように、学問の制度化に向き合う姿勢が伝わる一方、雑誌の分析についてはいくつか気になる点がある。まず、欧米のトランスレーション・スタディーズの日本における適用性に注目した著者は、現在のトランスレーション・スタディーズで共有されているキーワードをもとに雑誌の記事を抽出して分析しており、欧米とほぼ同時にトランスレーション・スタディーズが日本で発祥したと判断していた。

この分析には、「トランスレーション・スタディーズ」理論の枠組みから出発して、「トランスレーション・スタディーズ」の存在を再検証するややトートロジカルな印象が拭えない。ここで論じられた二つ「トランスレーション・スタディーズ」の外縁はおそらく異なったものであるが、正確に意味を伝えるための語句と概念の辨別が必要であろう。

また、翻訳論と実践をつなぐ『季刊翻訳』『翻訳の世界』の誌上における実務翻訳の内容や、『季刊翻訳』の

編集に携わる日本翻訳研究会の存在、執筆陣の学術活動などについては、雑誌研究としてさらなる掘り下げが可能であるという印象を受けた。そうすれば、『季刊翻訳』『翻訳の世界』という広義での学術雑誌からのトランスレーション・スタディーズの萌芽が、最終的には根付かなかった原因も浮上するのではないか。

なお、翻訳研究を主題とする本書がメディア研究に示唆を与える点としては、一九八〇年代の『翻訳の世界』に掲載された「メディア翻訳、ジャーナリズム翻訳」「漫画とコミック」をめぐる議論などが挙げられる。CNNニュースの翻訳に携わった宮前洸は「文化を媒介する翻訳者の位置」という記事の中でニュースにかかわる翻訳問題を取り上げていた。彼が言ったように、テレビニュースでは、言葉の表現の不足を映像が補強するというメディアの重層性があり、映像やボディ・ランゲージなどのコミュニケーション形式の問題を翻訳の規範のなかで考えていたことが興味深い。著者が言及したジャーナリズム翻訳研究については、報道記

事の翻訳において地域に合わせて変更・強調・削除されるなどのイデオロギー性が、翻訳研究では指摘されつつあったが、現段階で異文化間コミュニケーションへの関心がやや薄いメディア研究では、こうした問題がまだ十分に検討されていない。この意味で、学問がいかに制度化されるかという問題に限らず、学問の内部で注目される課題がいかに決められるかということも、本書から考えさせられた。

一方、「細分化されてしまった学問の世界に真の学際的な学問を生み落とす」ことができず、「カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズのような学際的な学問として認識されている分野があまり日本に根づかない」という批評がもし射ているのであれば、これまで比較文学、国語学、英米文学などの文学領域を中心に行われた日本の翻訳研究を、さらに集約化するために他の領域の理論もどん欲に取り込もうとする著者のさらなる研究の深化に期待したい。

① 佐藤卓己『流言のメディア史』岩波書店 二〇一八年。

② 坪井睦子『ポストニア紛争報道 メディアの表象と翻訳行為』みすず書房 二〇一三年。Beverly Curran, Nana Sato-Rosberg and Kikuko Tanabe, *Multiple Translation Communities in Contemporary Japan*, Routledge 2015. 参照。

③ 本書の出版社であるみすず書房のホームページにおいて、本書の分類タグが「社会・教育・メディア、翻訳・メディア論」と書いてある (<https://www.msz.co.jp/book/author/su/15973/>)。

④ Recommendation on the Legal Protection of Translators and the Practical Means to Improve the Status of Translators. (UNESCO, General Conference, 19th, Nairobi, 1976.) http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=13089&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html

⑤ 佐藤『ロスベアグ・ナナ』学問としての翻訳』みすず書房 二〇二〇年 四九頁。

⑥ 田中克彦は一九八四年に「支配装置としての翻訳語」という記事で、學術語という専門用語が規範化・体系化され、暗号のような言葉になり、専門家ではない人にとって「異言語」になると論じていた。

⑦ 佐藤『ロスベアグ・ナナ』学問としての翻訳』みすず書房 二〇二〇年 一二四頁。

⑧ 岡山恵美子「江戸から大正期までの翻訳と翻訳者―白話から読本まで―岡山冠山の軌跡」佐藤『ロスベアグ・ナナ編』『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房 二〇二一年。内山明子「福沢諭吉の西洋思想の翻訳と受容―『ポストコロニアル』を視座に」佐藤『ロスベアグ・ナナ編

- 『トランスレーション・スタディーズ』みず書房 二〇一一年、を参照
- ① 佐藤||ロスベアグ・ナナ『学問としての翻訳』みず書房 二〇二〇年、一三二頁。具体的に、「言語やそれに付随する多層な文化やある種の地域的な異なりというものにトランスレーション・スタディーズは目を向けないと、結局はただたな欧州言語内での共通事項であるかのように思えるものを国際的に普遍化しようとする畏におちいる」という。
- ② 佐藤||ロスベアグ・ナナ『学問としての翻訳』みず書房 二〇二〇年、一四六頁。